特別支援学校小学部における音楽を活用した自立活動について

和歌山大学教育学部：菅　道子（研究代表）、山崎由可里　上野智子　武田鉄郎　江田祐介
附属特別支援学校：今井典子　小林史　清水祐野　宮井仁美
教職大学院学生：井関迪恵　上野山優　栗本吉晃
アドバンスド・プログラム生：薗村麻矢　福田規江　山下美亜

１．はじめに（共同研究の趣旨と経過）

本学部附属特別支援学校小学部（以下、小学部）において、自立活動の指導は、学校生活全般を通して、また、算数・国語を合わせた指導「ことば・かず」の中で、長年行われてきた。自立活動は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」（2017（H29）年度改訂特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第 7 章第１　目標）ことを目的としている。小学部の子どもたちの実態から、小学部段階においては、教育課程の中に自立活動の時間を設定することは有益であると考え、本年 2019 年度より週 1 時間、取り組むことにした。

そこで、本共同研究では、普段より授業を把握し実践する小学部教員と音楽教育学、障害児教育学の立場から自立活動の視点で授業実践を見る大学教員、教職大学院学生とで連携し、特に音楽を活用した自立活動の教材づくり・授業づくりを模索していくことにした。

音楽を活用する理由は、自立活動の指導内容の 6 区分①健康の保持、②心理的安定、③人間関係の形成、④環境の把握、⑤身体の動き、⑥コミュニケーションが、音楽の有する機能と共通性をもっているためである。

この音楽の有する機能はしばしば音楽療法の場面で活用される。例えば 1970 年代～90 年代にかけて養護学校において音楽療法の原理や技法を取り入れて実践にあたった遠山文吉は、音楽療法を「個々の対象者に対する目的を遂行するために音楽の力を借りるつまり音楽を媒介として（音楽を通して）目的を遂行しようとする営み 」（遠山 2005、p.5 ）と定義し、子どもたちの教育支援のために音楽を積極的に活用した。遠山は、音楽の力、即ち音楽の機能として、①生理的な影響、②諸感覚への刺激、③運動を伴うもの、④認知に関わるもの、⑤コミュニケーションの手段、⑥社会的な要素を含むもの、⑦心理的な抑圧（ストレス）からの解放(遠山 2005、pp.14-17)を挙げている。これら 7 つの機能は前述の自立活動の 6 区分のどれかに該当するものであった。そこで本共同研究では、こうした知見に基づいて音楽を活用した自立活動の授業を考案しようと考えた。

連携の経過としては、2019 年 7 月に子どもの実態把握のために大学教員、大学院生等が授業を参観しカンファレンスを行った。その後、メール等でやりとりを行いながら学習指導案を作成し 12 月に授業を実施し、その後カンファレンスを行った。

２．研究の目的

小学部教員と大学教員、大学院生等が共同で授業について検討し、自立活動の授業における音楽の有効性を探る。また授業の充実、教材の工夫と改善を図る。

３．児童の実態と及び課題

本校小学部の子どもたちの実態は、発達的、特性的にも幅広い。例えば、おしゃべりしたいという気持ちは強いが発音が不明瞭でなかなか伝えることが難しい子ども、感情のコントロールが難しく、怒りがすぐに言動に表れてしまう子ども、運動が苦手であり身体の動かし方がぎこちない子ども等さまざまな実態の子どもがみられる。当たり前のことであるが、自立活動の課題は個々それぞれであり、担任が個別の指導計画に目標を掲げ、指導している。また子どもたちに共通していることは、音楽が好きであるということである。音楽の授業でリズム打ちをしたり、いろいろな曲を歌ったり観賞したり、楽器を演奏したりと、音楽の心地よさを感じている子どもたちである。

４．授業実践～

（1）１２月１３日（金）中学年「レッツ、すごろくパーティ！！～きもちすごろく～

教職大学院生２名が、「人間関係の形成」「コミュニケーション」にねらいをあてて、授業を行った。７月の学生による授業参観時に取り組んでいた「きもちすごろく」を発展させた授業実践であった。子どもたちに馴染みのある「ピタゴラスイッチ」のメロディである学生自作の《すごろくしよう》の曲を用いることで、雰囲気が和やかになったり、行動や気持ちの切り替がしやすいというような有効性があった。すごろくのマス目には、本授業のポイントであるミッションがある。自分の考えを言葉にして表し、相手に伝えることや状況に応じた気持ちを考えること等、子どもたちの実態と課題に合ったミッションを設定している。気持ちの表現については、気持ちカードがあったり、身体で表現しようというような内容があったりと子どもたちが気持ちを表現しやすい手立てが工夫されていて、子どもたちの持てる力を発揮することができた。また、ゲームの中でさいころの受け渡し「どうぞ」「ありがとう」というようなやり取りも意図的に設定されていて、子どもたちの課題に合っていた。授業を参観した担任の教員からは、わかりやすいかつ楽しい仕掛けのある教材の工夫が参考になったという感想がきかれた。他者視点に立つことが発達的にも特性的にも難しい子どもたちであるが、このような取り組みを行いながら、日常の生活の中で他者と感情を共有していく体験をしていくことを大切にしたいと感じている。

（2）12月１３日（金）　ジャンプとケンケンパ名人になろう！、問題に答えてゴールをめざそう

教職大学院生３名が、「心理的な安定」「身体の動き」にねらいをあてて、授業を行った。対象児童 A さんは、音楽がとても好きな子どもでありリズム感も良い。一方で身体の使い方が苦手であり、走り方等はぎこちなく運動には少し苦手意識がある。前回、学生による授業参観の際には、ケンケンパをする際、つま先立ちに関するアドバイスをいただき、自立活動の時間の指導の中で担任が継続的に取り組んできた経緯がある。今回の授業での音楽的な要素としては、ウッドブロック、タンバリン等をジャンプに合わせて鳴らすということで、跳ぶということを意識化させるという有効性があった。ステップに分けた指導やポイントとなる動きを分かりやすく体験しながら学べたことで、授業の最後にはつま先をうまく使って劇的にきれいなケンケンパをすることができ、本人の自信にもつながった。対象児童 B 君は、体幹機能障害があり、成長につれて身体の変形や拘縮が進んできた子どもで、自立活動の時間の指導においては、身体の動きを優先して行っている。また思春期に差し掛かり気持ちの面での不安定さが目立ってきているのが担任の気になるところでもある。今回の授業では、校内をウォークラリーで回りながら、ミッションに取り組むという内容であったが、本児の課題である身体の動きの調節がポイントとなっていた。音楽的な要素としては、本児の歩くスピードに合わせて、本児の好きな特急や普通電車に見立てながら体を動かすような内容で、意欲的に取り組むことができていた。また会話をしながら気持ちをほぐすことで、気持ちだけでなく身体もリラックスできた内容であった。最後の振り返りでは、子ども同士が授業の動画を通して、取り組みを報告しあうことで自分を表現したり、相手の良いところに気づいたりという素敵な仕掛けもあった。

４．まとめと今後に向けて

本共同研究を通して、自立活動の指導における音楽の有効性が見えてきた。それは音楽を中心的な活動としてではなく、部分的に取り入れるだけでも、その機能が十分に働くということである。例えば、ケンケンパの運動では、楽器に合わせて動作をすることで自然と呼吸を合わせたり、間を取ったりすることができていた。また、すごろくにおいては、《すごろくしよう》を歌うことで、活動の切り替えをスムーズに行うことができただけでなく、陽気な曲調によってその場の雰囲気が和やかにもなった。その他、本校教員と大学教員、教職大学院生等が連携し、それぞれの見方や考え方を交流させることで、より多面的に子どもたちを理解することにつながり、授業の充実が図れたことも成果として考えられる。

一方、課題としては、時間的にタイトであり、子どもたちの実態把握、課題の共通理解が十分にできていないままでの授業づくりになってしまったことである。また自立活動の音楽の有効性についても、もう少し深められたらよかったと感じている。

本研究での成果をもとに、今後も、自立活動の授業の充実を図っていきたい。

引用・参考文献

文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』開隆堂出版、2018
遠山文吉『知的障害のある子どもへの音楽療法ー子どもを生き生きさせる音楽の力』明治図書、2005